

平成 24 年度 海外臨床薬学研修報告書
「米国薬剤師の実態から学んだこと」

研修期間：平成 24 年 8 月 19 日～9 月 1 日

研修先：南カリフォルニア大学薬学部

薬学部薬学科 5 年

080973304

安西 志織

私は、平成24年8月20日から平成24年8月30日の間、南カリフォルニア大学で臨床海外研修に参加しました。研修は主に南カリフォルニア大学薬学部での講習と、各医療施設の見学 (Clinical Site Tours)となっていました。また、糖尿病に関するシンポジウム (Moving Targets:2012 Metabolic Syndrome : Past , Present , and Future)にも出席しました。

南カリフォルニア大学では、うつ病と精神科系薬剤・睡眠導入剤についての Wincor 教授と学生の講義、患者へのメディカルカウンセリングの手法、ケーススタディー (精神疾患の患者を例として、ケーススタディーとディスカッション)を行いました。他に HIPAA (United States Health Insurance Portability and Accountability Act of 1996) の受講と試験、ホワイトコートセレモニーの見学、南カリフォルニア大学のメインキャンパス・UPC (University Park Campus) と、薬学部のある HSC (Health Sciences Campus) 内の施設見学等、学生生活の一部を体験しました。

アメリカで行われているケーススタディーは日本の場合と同じで、Subjective、Objective、Assessment、Plan から構成されています。さらに Assessment の項目は Etiology と Evaluate Need For Therapy、Evaluate Current/Recommended Therapy に、Plan の項目は Recommended Drug Treatment ; Drugs To Be Avoided ; Further Tests、Goals & Monitoring Parameters、Patient Education にそれぞれ分類されています。項目を細分化することで、患者の病状とそれに対してなされた評価、治療、経過がより明確になっており、内容が分かりやすく、充実していると感じました。

患者へのベッドサイドでの薬学的なカウンセリングは、日本と同じく、Introduction (挨拶、自己紹介)、Body of Interaction (対話、服薬指導)、Conclusion (会話の締結) という流れで進行します。また、インタビューから得られる情報だけでなく、会話中の患者の様子 (顔つき、視線、声の張り、体色、体の動き、姿勢、身だしなみ、話の理解度など) をよく観察して、患者の状態を予測します。アメリカの薬剤師は、患者の症状が病理学的にどのように発生しているのか、薬剤の効果や副作用が病状にどのように影響を与えているのか、日本よりも治療に一步踏み込んで考えているように感じました。処方権を持っているためか、医師に近い役割を果たしていると言えます。また、病棟で患者の前に出るときは、自分がプロフェッショナルであることを意識し、自分の身だしなみや態度に注意します。

HIPAA は、患者の個人情報を守るためにアメリカで発行された法律です。私たちは研修中に医療施設の内部に入るため、事前に講習を受けました。アメリカの病院では、患者の医療情報を電子化することで、病院内の別のセクションや他施設・保険会社間で共有する必ことができます。患者の情報を必要なときに必要な場所で閲覧し、利用することができる反面、サーバーに不正にアクセスされるといった危険性も孕んでいます。そのため、患者情報の取り扱いに関して、その機密性と利便性を保つための標準を定めているのが HIPAA です。日本の国民皆保険制度とは異なり、国民は保険加入の有無や保険の種類の違いから、利用できる病院が分かれます。患者情報を電子データ化し、多数の医療施設や保険会社ごとの共有性を高めようとする動きは、アメリカらしいと感じました。

Clinical Site Tours は3日間の日程で、コミュニティーファーマシー、キャンサーセンター、南カリフ

オルニア大学病院内の調剤室を見学しました。

コミュニティーファーマシーには、薬剤師・テクニシャン・Pharm.D・クラークの4つの立場のスタッフがいます。薬剤師の業務は主に投薬・服薬指導・調剤薬監査で、特に中心となるのは調剤薬のファイナルチェック(監査)です。調剤はほとんどテクニシャンが行います。薬剤師は一週間に働くことのできる時間が決まっています。Pharm.D は薬学部の学生で、インターンのような感覚で薬剤師業務を行います。大学での授業の一環で、一定時間以上の勤務で単位をとることができます。調剤薬のファイナルチェック以外は、薬剤師と同じ業務を行う権利を持っています。テクニシャンの業務は、オーダー通りに調剤を行うことで、資格が必要です。来客者の目に触れない所で調剤を行っているテクニシャンは白衣を着用しておらず、カプセル剤などを素手で取り扱っていました。アメリカでは錠剤やカプセル剤のヒート包装は主流でなく、ボトルに必要数を入れる形になっています。薬の用法・用量・副作用等の説明はボトルに直接記載されており、カリフォルニア州では、英語とスペイン語の2つの言語が使用されています。ボトルに入った薬剤を監査する際は、数を数えるのではなく重量を量ります。アメリカのヒート包装は1枚が大きいので、ボトルの方が持ち運びやすく簡便です。アメリカでヒート包装を行うのは、病院や施設の入院患者、入居者で、薬剤を自己管理できない人の処方薬を調剤する場合です。1枚が1ヶ月分になっていて、日付・曜日と服用確認のチェック欄があります。残薬・コンプライアンスの確認が容易になっています。アメリカの病院はいくつかのコミュニティーファーマシーと提携し、院外処方が出された場合、患者はその中から薬局を選択します。薬局は日本のように面分業ではないため、取り扱う薬剤の種類はある程度限られます。薬暦(メディケーションシート)は、月単位で作成します。医師からの処方薬のオーダーや病名、アレルギー歴、嗜好品などが記載されます。また、患者の過去の服用歴は保険会社に問い合わせることで確認することができます。

キャンサーセンターでは、抗がん剤の調剤室と外来の化学療法が行われているケモ室を見学しました。治療は、患者に入院させると医療費が高額になるため原則日帰りで行います。ケモ室は、チェアエリアとベッドエリアに分かれており、患者の希望でどちらかを選択します。抗がん剤の調整はテクニシャンが行います。このテクニシャンには、コミュニティーファーマシーのテクニシャンと同じ資格に加え、一定の実務経験(インターン)と試験に合格することが義務付けられます。しかし抗がん剤を調剤する無菌室にはシャワールームなどの設備がなく、テクニシャンの作業着の着方も乱れており、清潔操作に関しては日本の方が上であると感じました。調剤室にはカメラが設置され、テクニシャンの作業の様子を外から薬剤師が監視することができます。このカメラの映像は、医療訴訟にも使用されます。抗がん剤は、ピッキング→調剤薬監査(薬剤師によるダブルチェック)→テクニシャンの混注という流れで調剤されます。一調剤ごとに調剤が正確に行われたかは確認されないため、この抗がん剤の取り扱い方についても日本の方が進んでいると考えることができます。

病院内の調剤室は、OTC 等が陳列された棚と投薬カウンターの奥にあります。アメリカの OTC には分類が無く、説明義務もありません。患者の様子や注意の必要な薬剤を購入される場合には、念のため注意事項を伝えることもあります。処方薬のオーダーは、病棟からコンピューターに転送

されてくるので、薬剤師が処方監査を行い、テクニシャンが調剤します。散剤をカプセルにつめる、軟膏を機械でミックスしボトルにつめる、錠剤・カプセル剤をボトルにつめるといった作業はすべてテクニシャンの仕事です。薬剤師は、患者にカウンセリングを行うこともあります。時間の関係で、一人の薬剤師が一日にカウンセリングできるのは6～8人です。薬剤の副作用が発生していないか確認、患者教育、コンプライアンスチェック、ワクチンの注射などを行います。他に、糖尿病、高血圧、高脂血症といった生活習慣病にかかっていないか、発病のリスクを抱えていないか確認し、予防のためのアドバイスもします。

アメリカの薬剤師は、高いレベルの教育を受けており、職能の幅が広く、医師と仕事を分担できるほどです。しかし、その反面薬剤の取り扱いが乱雑で安全性が保たれていないことに疑問をもちました。また所得や保険の関係上、患者が病院や薬局を自由に選択することができず、医療サービスの向上に繋がらないのではと感じました。今回の研修で、日本の薬剤師に不足しているのは勉強はもちろんですが、患者への積極的なアプローチと、医薬品を適切に扱うことができる重要な能力をもった職業であると認識してもらうことだと強く思いました。日本の薬剤師は劣っているわけではありませんが、現状維持ではやがて淘汰されてしまう恐れがあります。日ごろから薬剤にふれ、その取り扱いに責任をもつことは、それを使用する患者さんや処方するドクター・医療スタッフにも信頼を与えられる環境にあると思います。医薬品を使用する以上、薬剤師という職業は必要不可欠で、日本の場合さらに活躍できる可能性を持っています。まずは日々努力して信頼されるに足る知識を身につけ、さらに職能を広げるため患者や医療スタッフへの認知度を上げることが必要です。これから薬剤師となる私たちの課題であると思います。